2015 S1 火 1,2 国際農業工学　第 1 回レポート

ハチ公は大正 12 年(1923 年)秋田県大館市の斉藤義一さんの家で誕生し、1 年間ほどそこで育てられた。大正 13 年(1924 年)1 月 14 日に大館駅を出発し、20 時間以上米俵の中で列車に揺られて上野駅に向かった。

その頃、ハチ公の初代飼い主となる上野英三郎博士は東京帝国大学農科大学(今の東京大学農学部)の教授であった。上野教授は秋田犬が好きであり、ハチ公の前に 4 匹秋田犬を飼ったが、4 匹はみな 1 歳か 2 歳で死んでしまったために、その分ハチ公をたいへん可愛がった。

上京したばかりの頃、環境の変化が原因なのかハチ公は体が弱くなっていた。上野教授は以前の飼い犬が病気にかかったときに幾晩も寝ずに吸入をかけたり、氷枕や氷嚢を変えたりするなどの看病をしていたため、このときもハチ公を懸命に看病したと思われる。その年の梅雨が上がるとハチ公も健康を取り戻し、上野教授のお見送り・お出迎えが始まる。迎え送りするのは駒場の東京大学農学部校門と渋谷駅だった。上野教授は山手線と市電の 2 車線を使うことがあったため、合計 3 か所の異なる場所をハチ公はよく覚えていた。雪の朝も寒風の夜も送迎を続けた。上野教授は必ず別れ際にポケットに用意しておいたビスケットを与え、服が汚れるのもかまわずに飛びかかるままにさせ、声をかけていた。

しかし、大好きな上野教授との生活も大正 14 年(1925 年)5 月 21 日に 1 年半も経たないまま終わることになる。いつも通り大学までハチ公に見送られた上野教授は、教授会を終えた後、他の教授の部屋で少し話されたと思うと、そのまま亡くなったのである。ハチ公はそのことを知る由もなく、夕方農学部校門に行ったハチ公は暗くなるまで待ったが、上野教授は帰ってはこなかった。上野教授の家に戻った後は、家の中があわただしい中、そのにおいを求めて遺留品の置いてある物置へ入り、3 日間何も食べなかった。4 日目の 25 日、上野教授の通夜が行われたが、その意味が分からないハチ公は、上野教授の出迎えのため渋谷駅に行っていた。

上野教授の急逝により、上野宅を立ち退かれたハチ公はあちらこちらの家を転々とするが、昭和 2 年(1927 年)の初秋、渋谷駅から 20 分ほどの距離にある小林菊三郎宅に移った。これは、上野教授との思い出がある渋谷駅を求めてやまないハチ公の心をいたわった上野未亡人の思いからであった。場所を転々としている間も東京帝国大学まで、小林宅に移ってからも渋谷駅まで上野教授を迎えに来るハチ公の姿が見られた。渋谷駅では、野犬捕獲人につかまったり、小荷物室に入ったために駅員にひっぱたかれたり、顔に墨を塗られていたずらをされたり、夜の露店の主人に客の邪魔だと追われたりしたものの、それでも渋谷駅まで上野教授を迎えにくることをやめなかった。

しかし、日本犬保存会を組織していた斉藤弘吉さんがハチ公の悲しい事情を人々に知らせていたわってもらいたいと考え、朝日新聞に寄稿した記事が大きく取り扱われてからは渋谷駅の人だけでなく、多くの人に可愛がられ、やがていつの間にか忠犬ハチ公と冠され

るようになった。そこから銅像の建設なども行われ、亡くなって久しい今に至るまでハチ公は日本中の人々に愛されている。